

9月1日「防災の日」20代～50代の男女に聞く「2017年度防災意識調査」

日本の家庭の1/3は家族と防災情報が何も共有できていない

今年の「防災の日」は“おうちで防災訓練”しよう！

～「地震への備え」は家族との日頃の会話と防災訓練～

～“おうちで防災訓練”することで、防災の知恵と工夫をわが家仕様に最適化～

大和ハウス工業株式会社(本社:大阪市)は、9月1日の「防災の日」を前に、お客さまにとって「安全・安心」な住まいの提供に役立てるため、住宅購入検討者を対象にした防災意識と実態に関する調査を実施しました。

その結果、地震に対する不安は昨年よりも高まっているものの、3人に1人は家族間で防災に関する情報が共有されておらず、また、家族で避難訓練に参加したことがない家庭が85%にものぼりました。さらに、災害時の対策について家族間でコミュニケーションをとっている家庭は少なく、具体的な情報共有がなされていない、という現状が浮き彫りになりました。

■調査結果トピックス

1. 災害に対する意識は高く、地震に対して8割以上が「不安」と回答。一方で、防災対策は低下傾向に。

2016年では78.9%が地震に対して「不安」と回答し、今年は81.5%に上昇。一方で、「ラジオ、懐中電灯、医薬品、飲料水の準備」、「地震保険の加入」、「家具等の転倒防止」などの防災対策は軒並み低下傾向に。災害への不安が高まる一方で準備が手薄になりつつある？

2. もしも…災害が起きた時、家族で防災情報を共有しているのは半数以下。3人に1人は「何も共有していない」。理由は家族間での話し合いの機会が少ない？ 機会を作ることができていない？

災害が起きた時、真っ先に心配するのは「子どもや孫」のこと。でも、3人に1人は、「もしも…」の時の「避難場所」や「連絡方法」などを家族で共有していないという結果に。「必要性は感じていても…」、「どこかで大丈夫と思っている」、「(話し合う)時間や機会がない」など、家族間で話し合う機会が少ないことなどが理由に。

3. 1年以内の防災訓練参加率、男性35.9%、女性19.7%。さらに、女性の約4割が防災訓練に「参加したことがない」。防災に対する自己評価も「39点」。今年の防災の日は“おうちで防災訓練”を！

災害を未然に防ぐ、拡大防止などの訓練「防災訓練」。女性の約4割が参加したことがなく、1年以内の参加率も男女に差が。また、家族と防災訓練をしたことのない方は85.5%にものぼりました。いつ起こるかわからない「災害」。今年の防災の日は家族みんなで“おうちで防災訓練”を実践してみては？



■本リリースの目次

P2	調査背景・調査概要
P3	調査結果:防災意識と防災対策
P4-5	調査結果:災害時の家族間での共有
P6	調査結果:防災訓練の参加率
P7	調査に対する有識者コメント:危機管理教育研究所代表 危機管理アドバイザー 国崎信江さん
P8	災害、特に「地震」への意識と地震対策

■調査背景

ダイワハウスは、大地震やエネルギー不足、地球温暖化に対する不安などを解消すべく、お客さまにとって「安全・安心」な住まいを追求してきました。その中でも、2011年3月に発生した「東日本大震災」以降、大地震後に発生する連続的な余震により、住宅が繰り返し地震を受けることで耐震性能が低下する「ゆれ疲れ」※1に着目し、“減災”発想の戸建住宅を研究・開発してきました。

地震はとても恐ろしいものですが、地震と同等、もしくはそれ以上に気をつけなければならないのが二次災害です。地震の際は、大型の家具・家電の転倒、ガス漏れなどによる災害によって逃げ遅れてしまうことや、パニックとなり、防災行動を起こせないことがあります。

生活者の防災意識の実態を明らかにするとともに、「防災の日」が家族で防災について話すきっかけになることを目的として意識調査を実施しました。地震大国日本において、住宅を提供し続ける当社では、家族が常に安心して暮らすことができる家を目指して、様々な地震対策を施した住宅の実現を目指すとともに、本調査を通して世の中の防災意識の喚起につながればと考えています。

※1. 複数回にわたって、繰り返し大地震を受けることで、建物の構造体が少しずつ損傷し、耐震性能が少しずつ低下する現象。

■調査概要

調査名	:20代～50代の男女に聞く「2017年度防災意識調査」
実査時期	:2017年8月9日(水)～2017年8月12日(土)
調査方法	:インターネット調査
調査対象	:全国／新築戸建住宅(注文住宅・建売住宅)購入検討者
回答者数	:1,035名(20代～50代の男性518名・女性517名)

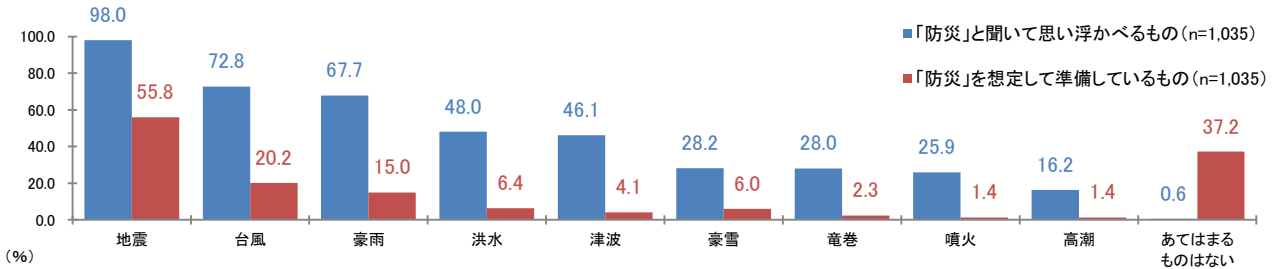
■調査結果:防災意識と防災対策

1. 災害に対する意識は高く、地震に対して8割以上が「不安」と回答する一方で、防災対策は低下傾向に。



まず、防災と聞いて思い浮かべるものを聞くと、「地震」(98.0%)、「台風」(72.8%)、「豪雨」(67.7%)の順となっています。次に災害を想定して防災の準備をしているものを聞くと、「地震」(55.8%)、「台風」(20.2%)、「豪雨」(15.0%)の順となりました。認知率に比べ防災準備率はまだまだ低く、「あてはまるものはない」(37.2%)と答えた、何も準備していない人が4割近くもいます[図1]。

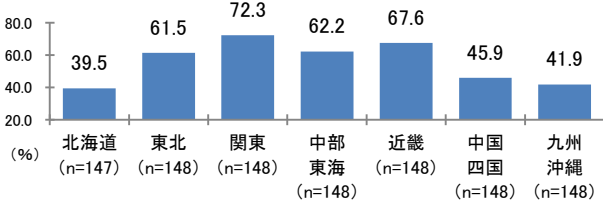
[図1]「防災」に対する認知・準備について



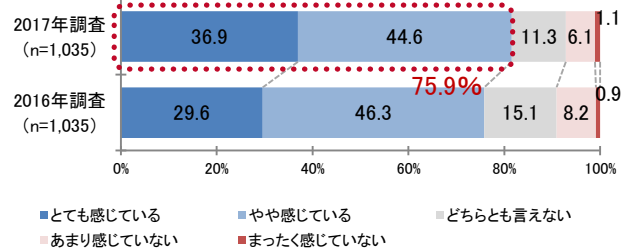
認知率・準備率ともに高い「地震」の備えについて、エリア別に防災準備率を見ると「関東」(72.3%)は7割を超え高いものの、「北海道」(39.5%)や「九州・沖縄」(41.9%)の準備率は低く、エリアにより差があることがわかりました[図2]。

また、住んでいる地域で将来発生する可能性のある大規模地震に対し、どの程度不安を感じているかと聞くと、3人に1人は「とても感じている」(36.9%)と答え、「やや感じている」(44.6%)を加えると81.5%が地震に対して「不安」を感じています。2016年の調査では75.9%が「不安」と答えており、昨年よりも不安を感じる人が増えています[図3]。

[図2]地震に備えた防災準備(エリア別)



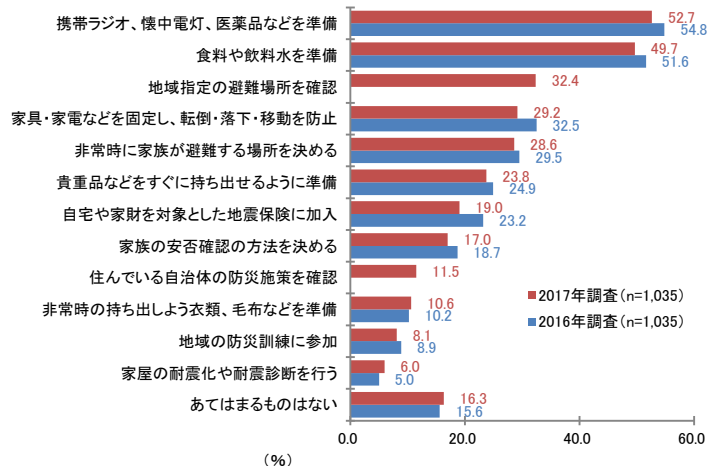
[図3]地震に対する不安



防災のために実践していることは「携帯ラジオ、懐中電灯、医薬品などを準備」(52.7%)、「食料や飲料水を準備」(49.7%)、「地域指定の避難場所を確認」(32.4%)が上位にあげられました[図4]。

地震に対する不安は昨年より高くなっていますが、昨年と比較すると、「自宅や家財を対象とした地震保険に加入」(2016年23.2%→2017年19.0%)、「家具・家電などを固定し転倒・落下・移動を防止」(2016年32.5%→2017年29.2%)など、ほとんどの項目で、実践率は僅かながらも低下しています。

[図4]防災のために実践していることは?



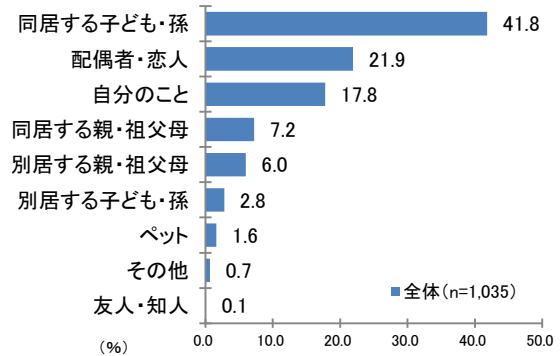
■調査結果:災害時の家族間での共有

2. 「もしも・災害が起きた時」、家族で防災情報を共有しているのは半数以下。
 3人に1人は「何も共有してない」。その理由は家族間での話し合いの機会が少ない? 機会を作ることができてない?



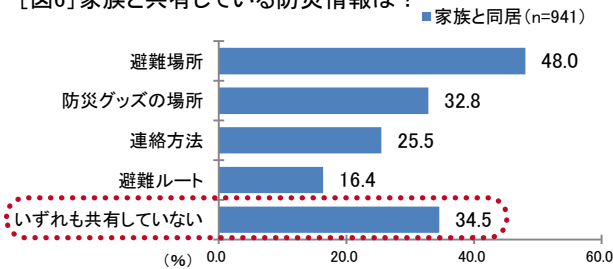
災害が起きた時、真っ先に心配する相手は誰かと聞くと、「同居する子ども・孫」(41.8%)が最も多く、次いで「配偶者・恋人」(21.9%)、「自分のこと」(17.8%)の順となり、自分のことより家族のことを心配する人の方が多くなっています[図5]。

[図5]災害時、真っ先に心配する相手は?



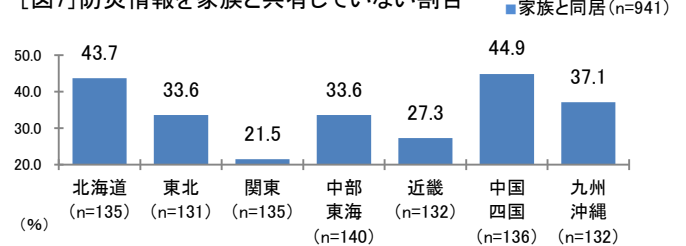
そこで家族と同居している人 941 人を対象に、災害が起きたときの対策について、同居する家族と共有できているか聞くと、「避難場所」(48.0%)、「防災グッズの場所」(32.8%)、「連絡方法」(25.5%)、「避難ルート」(16.4%)の順となり、いずれも半数以下と低く、3人に1人は「いずれも共有していない」(34.5%)と答えています[図6]。

[図6]家族と共有している防災情報は?



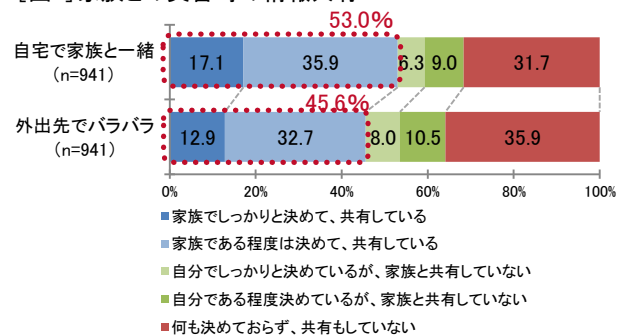
また、災害が起きたときの避難場所や避難ルート、連絡方法について、自宅と家族と一緒にいるときに家族で共有しているのは 53.0%と半数を超えますが、外出先で家族がバラバラの時は 45.6%と半数を切っています[図8]。

[図7]防災情報を家族と共有していない割合



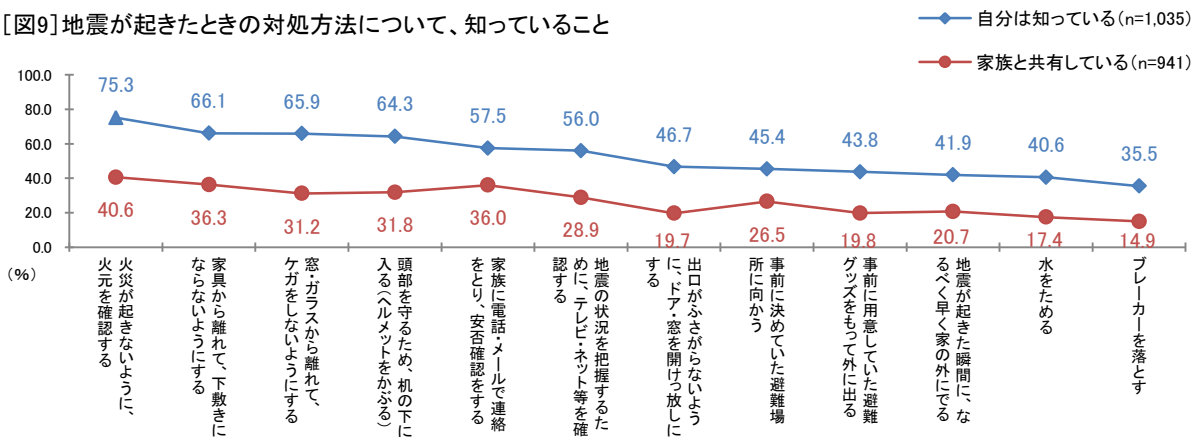
家族それぞれが別の場所に外出して被災した場合、半数以上が家族と連絡がとれない状態に陥ることが危惧されます。

[図8]家族との災害時の情報共有



地震が起きたときの対処方法について、自分が知っていることを聞くと「火災が起きないように、火元を確認する」(75.3%)、「家具から離れて、下敷きにならないようにする」(66.1%)、「窓・ガラスから離れて、ケガをしないようにする」(65.9%)などを認識していますが、家族と共有しているのは「火災が起きないように、火元を確認する」(40.6%)、「家具から離れて、下敷きにならないようにする」(36.3%)、「家族に電話・メールで連絡をとり、安否確認をする」(36.0%)と低く、いずれも自分の認知の半数程度しかありません[図9]。

[図9]地震が起きたときの対処方法について、知っていること



地震の対処方法について家族と共有できていない理由を聞くと、「どこか大丈夫だろうという気持ちがある」(女性 35 歳、新潟県)、「現実味がないから。この考えは甘いとおもっているが話し合うタイミングがない」(男性 31 歳、三重県)など、どこか自分は大丈夫という油断が大きいようです。また、「防災グッズは色々そろえているが避難場所や避難ルートについては失念していた」(女性 35 歳、北海道)、「だいたいは決めていますが具体的には決めてない。きちんと話さなくてはと思っている」(女性 35 歳、熊本県)のように、なんとなくは共有できていても、具体的なことまでは話が及んでいないというケースが少なくないようです[図 10]。

[図10]地震の対処方法について家族と共有していない理由

自分には関係ないと心のどこかで思っているから。	男性	35歳	広島県
どこか大丈夫だろうという気持ちがある。	女性	35歳	新潟県
現実味がないから。この考えは甘いとおもっているが話し合うタイミングがない。	男性	31歳	三重県
自分の住んでいる地域が、特に大きな災害にあったことがないせいか、防災について相談し合ったりする機会がなかった。	女性	37歳	山形県
きちんと、話さなければならぬのは理解しているが…どこかで大丈夫というのがあるので話し合っていない。	女性	35歳	北海道
話し合わなくては、と思いながらも、なんとなく「まだ大丈夫かな」という勝手な思いで、話し合っていないから。	女性	35歳	兵庫県
どうしても地震がこなくなるとしばらくはと思って楽観視してしまう。	男性	36歳	静岡県
共有するべきだとは思っているがなかなかそういう話にならない。	女性	33歳	大分県
会話、共有しなければならないのは分かっているが、改めてそのことについて話し合う時間がないから。	女性	34歳	宮崎県
必要性は感じつつも、具体的に決めるとなると大変そうであり、面倒だとすら思ってしまう、なかなか会話するに至らずにいるから。	女性	32歳	愛知県
テレビなどを見た直後は防災について準備、共有しなければと思う時間が経つにつれどこか他人事と感じてしまい、結果何も準備していない。	女性	35歳	北海道
家族パラパラだったらということを考えてなかった。	女性	35歳	広島県
防災の準備はしているが、もし災害が起きた時の話をあまりしていないから。	女性	29歳	宮崎県
基本的な対策は話す機会はあるが、避難場所の確認までは決めていない。	男性	52歳	北海道
防災グッズは色々そろえているが避難場所や避難ルートについては失念していた。	女性	35歳	北海道
だいたいは決めていますが具体的には決めてない。きちんと話さなくてはと思っている。	女性	35歳	熊本県

■調査結果:防災訓練の参加率

3. 1年以内の防災訓練参加率、男性 35.9%、女性 19.7%。さらに、女性の約 4 割が防災訓練に「参加したことがない」。防災に対する自己評価も「39点」。今年の防災の日は“おうちで防災訓練”を！

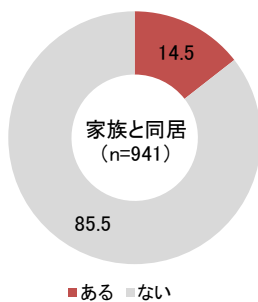


災害に備え、災害を未然に防ぎ、災害の拡大を防ぐための訓練が防災訓練です。家族や同居している人と避難訓練をしたことがあるかどうか聞くと、85.5%が「ない」と答えています[図 11]。

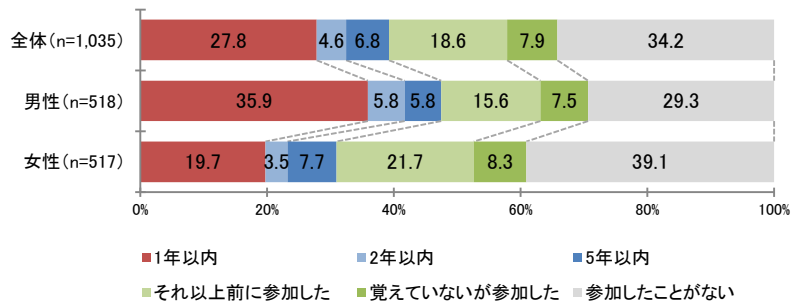
また、防災訓練への参加経験について聞くと、男性の 3 人に 1 人は 1 年以内に防災訓練に「参加」(35.9%)していますが、女性は 19.7%と少なく、女性の約 4 割は防災訓練に「参加したことがない」(39.1%)と答えています[図 12]。防災訓練は会社などで実施される事が多く、主婦の場合、参加する機会が少ないことがその要因と推測されます。

最後に、自分の防災意識・防災対策を 100 点満点で自己採点してもらった結果、今年は平均で 39.42 点となり、昨年(39.49 点)とほぼ同じく、低い評価となっています[図 13]。

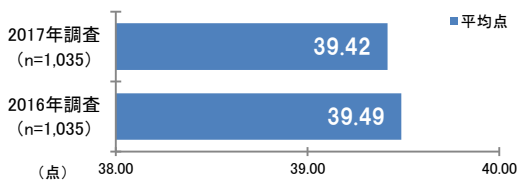
[図11] 家族と避難訓練の経験



[図12] 防災訓練の参加経験について



[図13] 防災意識・対策の自己採点



災害はいつ起きるかわかりません。家族と一緒にいないときにも、十分起こりえます。今回の調査では、災害時、家族のことを自分のことよりも心配するにも関わらず、災害時の対策について家族間コミュニケーションがとられている家庭は少なく、具体的な情報共有がなされていない、という現状が浮き彫りになりました。

9月1日は「防災の日」です。防災について家族で共有するタイミングと捉え、万が一のときに具体的にどう行動するか、今年は、家族で防災について会話をしたり、家族みんなで“おうちで防災訓練”をなさってみてはいかがでしょうか。

■“おうちで防災訓練”のためのアドバイス

家族単位で防災を考え、家族の防災訓練として「おうち de キャンプ」を提唱なさっている危機管理アドバイザーの国崎信江さんに、今回の調査結果を踏まえ、“おうちで防災訓練”のためのアドバイスをいただきました。



国崎信江(くにざき・のぶえ)さん 危機管理教育研究所代表 危機管理アドバイザー
女性として、生活者の視点で防災・防犯・事故防止対策を提唱。地震調査研究推進本部政策委員会、防災科学技術委員会などの国や自治体の防災関連の委員を務め、現在は講演活動を中心に、メディアへの情報提供のほか、被災地での支援活動を発生直後から継続して行っている。
主な著書に、「決定版！巨大地震から子どもを守る 50 の方法」(ブロンズ新社)、「サバイバルブックー大地震発生その時どうする？」(日本経済新聞出版社)、「マンション・地震に備えた暮らし方」(つなぐネットコミュニケーションズ)、「これ 1 冊でできる！わが家の防災マニュアル」(明治書院)など多数。

■家族の防災コミュニケーション できていない理由は「何を話し合えばいいのかわからない」から

今回の調査では、家族間の防災コミュニケーションがとれていないという結果でしたが、家族で防災について何を話し合えばいいのかわからない、という理由が大きいのではないのでしょうか。

家族の携帯番号は知っていても、震災時には繋がりにくくなります。集合場所を決めているご家庭も多いようですが、例えば近くの小学校に決め、実際に集合したとしても、同じように被災した人が大勢いて、家族となかなか会えない場合もあります。防災について家族で共有すべき情報とは、被災した場合を想定し、できるだけ具体的に、小学校集合ではなく、小学校の校庭の鉄棒の横というように、細かく取り決めておくことが大切です。

わが家では、集合時間を 1 日 2 回、待ち時間も 20 分とし、会えなければ次の時間に集合するようにしています。寒い中で長時間待ち続けたり、早く向かわなければと無理をすることで、事故につながる危険も生じます。

■家族で防災について話し合うきっかけにもなる、「わが家の防災マニュアル」をつくりましょう

災害時に必要な情報は、家族構成や立地条件など各家庭で異なることから、私は「わが家の防災マニュアル」を作ることをおすすめしています。家族の連絡方法や待ち合わせ場所・目印、自宅から避難する際に誰が何を持ち出すかなど具体的に書き込み、家族全員で所持しましょう。私の HP にひな形を用意しているので、ご利用ください(http://www.kunizakinobue.com/bosai/bosai_manual.pdf)。

この中に家族の行動把握という項目がありますが、家族が普段どこで何をしているのか、案外知らないものです。お父さんは会社、子どもは学校と思いがちですが、曜日・時間である場所は変わります。毎朝、きょうは何時頃どうしているか、家族で共有する習慣を身につけるのも、家族の防災コミュニケーションに役立ちます。

■防災訓練では受け身になりがちな女性も、「おうちで防災訓練」ではお母さんが防災リーダーに

防災訓練は男性主導のシーンが多く、女性は受け身になりがちです。しかも、知らない人しかいない防災訓練に参加するのは、誰もが二の足を踏んでしまいます。しかし、家や家族を守る視点で行う“おうちで防災訓練”は、家のことを段取るのが上手な母さんの方が得意分野かもしれません。私は家族で参加する防災訓練として、「おうち de キャンプ」を提唱しています。アウトドア用品はそのまま防災用品としても使えるので、自宅被災したと想定し、電気・ガス・水道を一時的に使用できない状態にして、自宅でキャンプをします。そうすると、流せないトイレを使ってしまって解決策を家族で話し合ったり、フローリングの床で寝ると、寝袋だけでは全身が痛くてクッションが必要だと実感したり、体験してみることで初めてわかることがたくさん出てきます。わが家では、懐中電灯よりヘッドライトの方が使い勝手がいいことがわかったので、家族分のヘッドライトを準備しています。

私が主催する被災体験のワークショップで、キャンプやボーイスカウトなどの経験がある子どもは、知らない人との雑魚寝でも熟睡でき翌日もケロッとしています。経験のない子どもは寝ることすらできず、肉体的にも精神的にも参ってしまう傾向があります。“おうちで防災訓練”を行うことで、経験が強い精神を育み、子どもの生きる力を高めることにつながります。災害はいつ起こるかわかりませんが、備えることはいつでもできます。“おうちで防災訓練”することで、防災の知恵と工夫をわが家仕様に最適化し、災害に負けない強い心を育ててください。

■災害、特に「地震」への意識と地震対策

◇災害の中でも特に、「地震」に関する意識は？

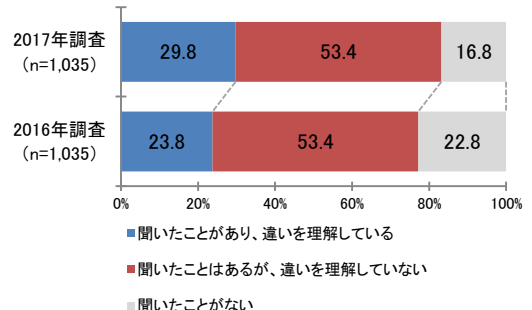
●地震対策の建築技術への理解が深まる

建築技術には耐震、制震、免震がありますが、これらの建築技術の違いを理解しているかと聞くと、約 3 割が「違いを理解」(29.8%)しており、半数は「聞いたことはあるが、違いを理解していない」(53.4%)と答えています。

昨年と比較すると「違いを理解」(23.8%)する人が増え、「聞いたことがない」(2016年 22.8%→2017年 16.8%)が少なくなっています[図 14]。

地震に備えた建築技術への理解が深まっているようです。

[図14]耐震・制震・免震の違いの理解

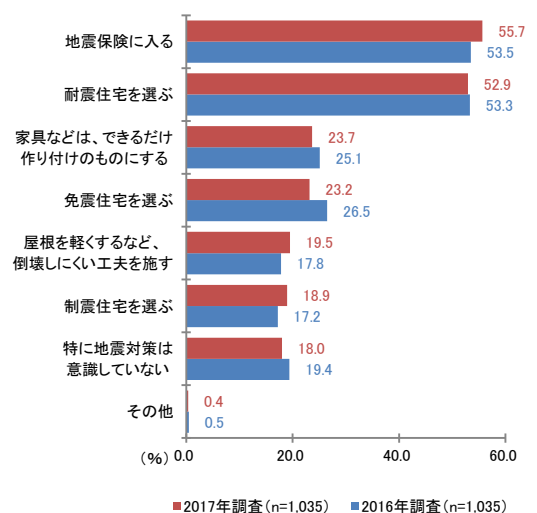


●戸建住宅の地震対策のツートップ「地震保険」と「耐震住宅」

将来、戸建住宅に住むと仮定して、どんな地震対策をするかと聞くと、「地震保険に入る」(55.7%)と「耐震住宅を選ぶ」(52.9%)という答えが多くなっています。

昨年も同様に、「地震保険」(53.5%)と「耐震住宅」(53.3%)が多い結果でした[図 15]。

[図15]自分が行う戸建住宅の地震対策



■家そのものが動揺しないことが減災のカギ

当社が 2014 年 1 月に発売した戸建住宅最上位商品「xevoΣ(ジーヴォシグマ)」は、これからの大規模地震に備える、“減災”発想の戸建住宅です。“減災”のカギとなるのが、「Σ形デバイス」という独自の技術。Σの形をしたデバイスがしなやかに動くことで地震の揺れを効果的に吸収し、建物の揺れを早く収束。繰り返しの巨大地震がきても、初期性能を維持することができます。もしも災害が起きた場合でも、家も、家族も動揺しない状態をつくることで、事前に備えていた防災行動をしっかりと取ることができるようになります。「xevoΣ(ジーヴォシグマ)」は、発売以来、販売目標を大幅に上回る累計 10,000 棟以上を販売し、ご好評いただいています。